

いつだって  
山の向こうで  
待ってるよ。  
その夏、少年サンウは、  
おばあちゃんと二人で暮らした。  
慣れない山の生活に  
わがままし放題のサンウだが、  
決して叱らないおばあちゃんに  
少しずつ心を開いていく……。



# おばあちゃんの家

イ・ジョンヒャン監督作品

2002年 大鐘賞最優秀作品賞  
最優秀脚本賞, 最優秀企画賞受賞

世界の名画を見る会 vol.21 企画・構成 高野悦子



- 講演 (14:00~)  
高野悦子「“おばあちゃんの家”と韓国映画」
- 上映 (15:00~)  
「おばあちゃんの家」(韓国/2002年/カラー/87分)

2003 11月24日(祝) 開場 13:30  
開演 14:00

黒部市国際文化センター カラーレ (カーターホール) 全席指定 1,500円

- この公演は黒部市の助成により低料金に設定しております。
- 5歳未満のお子さまの入場はご遠慮願います。
- 公演中の一時保育(無料)を希望される方は事前にご連絡ください。

■主催: 財団法人黒部市国際文化センター ■共催: 北日本放送 ■後援: 黒部市 黒部市教育委員会 月刊 Takt

■プレイガイド

黒部市	カラーレ	☎(0765)57-1201
	メルシー	☎(0765)54-2221
魚津市	新川文化ホール	☎(0765)23-1123
	魚津サンプラザ	☎(0765)24-3030
入善町	コスモホール	☎(0765)72-1105
	コスモ21	☎(0765)74-9100
宇奈月町	宇奈月国際会館	☎(0765)62-2000
朝日町	アスカ	☎(0765)82-2000
滑川市	サン・アビリティーズ	☎(076)475-3342
富山市	インフォーマット [市民プラザ]	☎(076)491-0110
	[CIC駅前店]	☎(076)444-7013
津中町	アルプラザ富山(ファホール内)	☎(076)466-1828
高岡市	高岡大和	☎(0766)27-1774

●お問い合わせ・チケットの申込み●

カラーレ  
富山県黒部市三日市20番地  
TEL. 0765-57-1201  
FAX. 0765-57-1207  
http://www.colare.jp/  
e-mail: info@colare.jp

開館時間: 9:30~22:30(土曜~23:00) / 毎週水曜休館



# おばあちゃんの家

2002年/韓国映画/韓国語版/カラー/35mm/ヴィスタサイズ/ドルビーSRD/5巻/2,388m/87分  
字幕翻訳: 古田由紀子/2002年韓国・大鐘賞最優秀作品賞、最優秀脚本賞、最優秀企画賞受賞  
配給: 東京テアトル、ツイン/岩波ホール創立35周年記念作品



## おばあちゃんの眼差し、ふるさとの風の匂い

### 小さな村の暮らしを描いた映画が、 韓国で400万人の心に響いた

陽のあたる縁側、画面いっぱいに広がる緑の木々と山道、流れる時間に身を任せて暮らす村の人々、腰をかがめてゆっくりと歩くおばあちゃんの姿……。2002年春、韓国の人々は、ある一本の映画に夢中になった。それは、ほとんど素人に近い7歳の少年と、映画出演はおろか、映画そのものを見たことさえないというおばあちゃんが主演、おばあちゃんが実際に住んでいた山の中の村が舞台で、その他の出演者も全員、村の住民という映画だった。

そんな“田舎の村の暮らし”に、韓国の人々が胸を打たれて、400万人動員という異例の大ヒットとなった。さらに韓国のアカデミー賞にあたる大鐘賞最優秀作品賞、最優秀脚本賞、最優秀企画賞を受賞、その評判は海外にも広がり、数々の映画祭で上映され、注目を集めた。

アメリカでも2002年11月、大手映画会社のパラマウントが公開、韓国映画のオープニング成績のトップを記録し、大きな話題を呼んでいる。



### 「おばあちゃんに感謝する映画を撮りたかった」と語る女性監督のやさしさに満ちた作品

監督は、「亡くなったおばあちゃんの深い愛情に感謝する映画をずっと撮りたかった」と語るイ・ジョンヒャン。女性監督が少ない韓国において、彼女は脚本も手がけた監督デビュー作『美術館の隣の動物園』(98)で大鐘賞新人監督賞を始め数々の賞を受賞し、その実力が認められている。2作目となる本作でも自ら脚本を担当、主人公二人の日常を愛情とユーモアをこめて描いている。その結果、サンウが村で過ごす一見何気ない一瞬一瞬が、かけがえのない体験となり、私たちの胸を熱くさせるのだ。

おばあちゃん役のキム・ウルブンと監督の出会いはまさに“運命”だった。「そこへ行けば私の理想のおばあちゃんが待っている」という監督の直感のもと訪れた韓国中部の忠清北道・永同(ヨンドン)の村で、監督はキム・ウルブンに“一目惚れ”した。サンウ以外の出演者は全員素人だが、監督は彼らの生きてきた人生そのものを引き出してフィルムに焼き付けることによって、この爽やかな物語に真実味と厚みを付け加えることに成功した。



### 思い出すのは、おばあちゃんの 無条件の愛に包まれていた頃

母親と二人でソウルに住むサンウは、ある日、田舎のおばあちゃんの家へ連れて行かれる。母親が新しい仕事を見つけるまでの間、会ったこともないおばあちゃんと暮らすことになったのだ。話すことができず、読み書きもできないおばあちゃんをバカにし、不自由な山の生活に不満を爆発させるサンウはわがままのし放題。しかし、決して叱らず、サンウの願いを一心に叶えようとするおばあちゃんにサンウは少しずつ心を開いていく。やがて彼の心に信頼と愛情が芽生えた時、母親が迎えにやってくる……。

この映画を見た人々は、自分のおばあちゃんを思い出し、その無条件の愛情に包まれていた頃を懐かしむ。それは、原題の「家へ……」が示すように、国境や人種を超えて世界中の人々に共通する“大切な思い出”なのだ。

